

---

# 転生HD

けい馬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生HD

### 【Nコード】

N7023Y

### 【作者名】

けい馬

### 【あらすじ】

死んだはずの『僕』が生まれなおしたのは、なんだかとてもフアンタジーな世界。異世界を舞台に、魔女に育てられた主人公の第二の人生にして初めての物語。

## プロローグ（前書き）

初投稿で、稚拙な文章ですが、生暖かい目で見守ってやってください。  
まずは、プロローグでございます。

## プロローグ

死後の世界があるかどうかなんてまじめに考えたことはなかったけれど、漠然と、まあそんなものはないんだろうなーと思っていた。人間死んだら肉の塊になつて、それで終わり。天国も地獄も、神も仏もありやしない。こうやって何かを考えることもできなくなる。何も思えないってことはひどく怖いけれど、生きているうちに心配しても意味のないことなのだろう。怖いという感情も、なくなるのだろうし。

しかしこういつた僕の死生観は、どうやら僕に限っては、まったくの誤りだったらしい。

僕は死んだはずなのに、こうして益体のない思考を続けている。

十三歳で、癌だった。

死に方としてはありふれたものだと思う。日本人としてはただけど、でもまあ、ちょっと早かったかな。僕は何もなしえていない。

恋とか親孝行とかしたかった。

恋は、とりあえず置いておくとしても、親孝行について考えると、僕は情けなくて泣きそうになる。本当に何もできなかった。無である。いやマイナスかな。

子供は三歳までに親孝行のすべてをなし得ている。という言葉を聞いたことがあるけれど、どうだろう、生まれた瞬間から死にそう、病院以外の世界を知らない僕では、両親も気苦労のほうが多かったのではなからうか。

今となつては聞くこともできない。

まあそんなことを聞く勇気もなかったのだけけれど。

\*\*\*

さて、今の話。

死んで、おそらくは灰になったであろう僕は、どうしたことか、現在もこうやって考え事をしている。それも、赤ん坊の姿で。

気が付いたらこうなっていた。前世の、（よくわからないけれど前世という言葉を使っておく）記憶を思い出すようになったのは目が開くようになってからだと思う。断片的に、徐々に、思い出していき、今では前世と同じほどには頭が回る。

のだが、生まれなおしたこの世界は、どうやら前世とはだいぶ趣を異にしているらしい。

一言でいうと、ふぁんたじー。

僕は現在、魔女に育てられている。

\*\*\*

この魔女の姿だが、もう、ザ・魔女といった感じである。大きな鉤鼻、ずるがしこそうな目。まがった腰は濃紺のローブに覆われ、同じ色のとんがり帽子を頭にのせている。

これは後で聞いた話なのだけれど、僕は生まれたての状態で、魔法の家の前で眠っていたらしい。魔法は初め僕のことを自分に対する捧げものだと思ったそうだ。人里離れた魔法の屋敷に赤ん坊が一人で来られる道理もない。熱心な魔法の信奉者がわざわざ届けに来たのだと確信していたのだとか。

魔法はある程度太らせてから僕を食べるつもりだった。魔法がそろそろ食べごろだろうと判断した時には、僕は記憶を取り戻し、意識もはっきりしていた。

僕の首根っこつかんで涎を垂らしながら大きな鍋に向かって歩く魔法にむかって、

「やめろおおおー！」

と叫ぶぐらいには声帯も発達していて、言語は違えど何事かをは

つきり発音した赤ん坊に魔女が興味を抱いたおかげで、僕の二度目の絶命はまぬがれたのであった。

\*\*\*

「ぬううああああああ！」

僕の声である。

およそまだ生まれて間もない赤ん坊の発する叫び声ではない。

生きたまま鍋で煮られることは回避したものの、僕が苦境に立たされていることに変わりはなかった。ちよつとしたやり取りの後、僕にある程度の知性を認めた魔女は、紙に図を描いて、こういった内容のことを僕に伝えてきた。いわく、『日が暮れる前に立ち上がって歩いて見せる。できなければ喰う』

はいはいさえまだのこの僕である。立つだけならまだしも、歩けて。

いやしかし、できないと泣いていても何もならない。ぷにぷにのこぶしを握り締め、にじんだ涙と汗をぬぐい、僕は掛け声とともに両足に力を込めるのであった。ぬううあああああ！

\*\*\*

魔女が面白半分に突きつける難題に、文字通り命がけて臨み、そのことごとくを紙一重で切り抜けてスーパー赤ちゃんと化した僕だったが、それも卒業して幼年期に入った。

そのころになると僕はこの世界の言葉を不自由なく使っていたし、魔女の仕事を手伝いもしていた。といっても薬草摘みや、獣捕獲のための囹役などだったけど。どうやら食べられる心配だけはなくなつたようで、ちよつと一安心。代わりに魔女の作る薬の実験台にされることになつたし、そのたびに皮膚が色さまざま柄さまざまに変化して、やっぱり死にかけたのだけれど、食べられるよりはよっぽ

どまじだと思えることにした。

\*\*\*

そしてやってきた少年期。このころになると僕は魔女の右腕として活躍するようになっていた。魔女の持つ知識はあらかた叩き込まれていたし、魔女の薬によって僕の肉体は凶暴な野生動物を素手で倒せるように強化されていたのだ。薬の副作用として猫耳になったり髪の色が白くなったり片眼が外れて独立して動くようになっていたけれど、僕は猫が好きだし白色は前世から僕のテーマカラーだったので何も問題はなかった。独立した目玉にはアルトという名前を付けてやった。

僕は幸せだった。

\*\*\*

「お前、今いくつだい？」

魔女のほうから話しかけてくるのはまれだったので、僕は驚いて反応が遅れた。薬草をすりつぶしながら、一拍おいて答える。

「もうすぐ十三になります」

魔女に鍋に突き落とされそうになった日を暫定的に誕生日としている。

「そうかい。もうそんなになるのかい……」

どこか感慨深いな魔女の声を背中に聞きながら、僕は乳鉢に新しい薬草を加える。この薬を作るのは何回目だっけ。一番多く作ったことのある薬だっけ。これは確かなんだけど。

我ながら手順よく作業を続けていると、強い口調が聞こえた。

「お前、明日ここを出な」

冷たい、突き放すようなその声に、僕は一瞬頭が働かなくなる。言葉の意味を理解するのに時間がかかった。

「な、なにを」言っているのですか、という言葉は続く魔女の早口にさえぎられた。

「魔法使いは十三で独り立ちすることになっている。そういうしきりがあるんだよ、大昔からね。しきたりには従わなければならぬ。教えられることは教えだし、やっていけるだろうさ。本当のところ、お前が来てからうるさくて仕方ない。まったく十三年も我慢した自分を褒めてやりたいくらいだ。……早く出て行ってわたしを静かに暮らさせておくれ」

言つと、魔女は咳き込んだ。

乾いた、嫌な感じの咳だった。

僕はできたばかりの薬を持って、ベッドに横になっている魔女のそばに跪いた。

「いつもの薬です」

魔女の背中に手を回し、薬が飲めるように上半身を起き上がらせる。

「……お前が作る薬を飲むのも、今回で最後だね」  
薬を持つ手はふるえている。

「こんな状態のあなたをおいて、出ていけるわけないでしょう」

魔女は、僕を拾うその前から、治ることのない病を抱えていた。

「お前は、出て行かなければ、ならない」

「喋るのがつらいなら黙っていてください」

「しきたりなんだよ」

「……魔法使いのしきたりなんて知りません。僕はあなたのせいで得体のしれない生き物になっていますからね。どんな慣習も知ったこっちゃありませんよ」

「ふふっ」

魔女の漏らした笑い声は、なぜか僕の胸をえぐった。なんだからもう取り返しのつかないところまで来てしまったように思えたのだ。

「僕は出ていきません」

自分に言い聞かせるように繰り返す。



「出ていきません」  
魔女は再び横になり、目を閉じる。  
一つ細いため息をつく、規則正しい寝息をたてはじめた。  
僕は椅子を持ってきてベッドのそばに座った。日が暮れて夜になってもその場を動かなかった。

\*\*\*

どれぐらいの間そうしていたらろう。  
夜は家の中にも忍び込んで、僕らを照らす光源は月明かりだけ。  
暗闇でもよく見える目で、魔女を眺めると、彼女の口元がかすかに動いた。耳を近づけて聞き取るうとする。  
「……わたしは、明日死ぬだろう」  
小さくつぶやくような声だったが、確信に満ちていた。  
魔法使いは自分の死期が正確にわかるのだ。  
「死ぬときはこの屋敷も道連れだ。わたしが死んだら跡形もなく燃えてしまうよう、呪いをかけてある。わたしが生きた証は何一つ残らないようにしているのさ。……お前以外は」  
僕は何も言えず、ただそこに座っていた。

\*\*\*

翌日、早朝。僕は旅の支度を整え、眠っている魔女を起こさないように外へ出た。  
天は高く空気は澄み、出発の日としてはこれ以上ないものだった。目玉のアルトを頭の上へのせ、まっすぐに屋敷から遠ざかる。  
絶対に振り向かないことが魔女との約束だった。  
魔女と交わした最後の会話を思い出す。

「聞きたいことがあります」

聞けなかったことを聞かなければならない。

「僕は、親孝行……、できていたでしょうか……？」

前世のような情けない思いはしたくないと、ずっと考えて過ごしてきた。そのはずなのに、僕の心は悔しさでいっぱいなのだ。また繰り返し。僕にはそもそも、叶えられる望みではないのかもしれない。何度人生を繰り返しても。

だけど聞かなければならないと思った。それぐらいの勇氣は持ちたいと思った。

「……ばかだねえ」

魔女は鼻で笑った。

「お前は本当にばかだ。あまりのばかさ加減に情けなくなってくるよ。……まったく、そんなことは聞くまでもないことだろう。お前の眼は節穴かい？ 両目とも外れちまったんじゃないだろうね。」

……十三年だ。十三年間ずっと、わたしは幸せだった。お前には想像もつかないだろうね、百年以上ひとりきりで、誰にも思いやられることなく、誰を思いやることもなく生きてきた老婆の気持ちなんて。その老婆が突然現れたお前という存在を、どれほどまぶしく……それに愛しく思っていたかなんて」

魔女は咳が出るのも構わず、絞り出すように言葉を継いだ。

「ありがとう。ありがとうよ。お前を食わなくてよかった。育ててよかった。わたしは、お前がいてくれて、本当に、幸せだった。お前は、わたしの自慢の」

僕はそこまでしか聞くことができなかった。とどめていた涙があふれ出して、号泣し始めてしまったから。

\*\*\*

歩き始めてしばらくすると、後ろから、何か爆ぜるパチパチという音が聞こえてきた。漂ってくる煙が目染みて涙がにじむ。

僕は構わず歩き続けた。

振り返ることなく、振り返ることなく。

少年は街を歩く(前書き)

はじまります。

## 少年は街を歩く

魔女のもとを離れて、ひとりで生きていかなければならなくなつた僕ではあつたけど、具体的な生計の立て方を全然思いつけなかった。

通りすがりの馬車を走つて追いかけることにより、何とか街らしき場所に行くことはできたのだが、一文無しの僕はそこで途方に暮れることとなつたのだ。ちなみにこの馬車だが、正確には馬車ではない。車を引いているのは馬っぽい何か別の生き物で、名前は知らない。

「アルト、このままじゃ僕の二度目の死因は餓死つてことになりそうだよ」

僕の肩に乗つても珍しそうに道行く人々を眺めている、元、僕の左目に話しかけてみた。

アルトは魔女が僕の目玉をくりぬいて作りだした人工生命体で、自分の意思で行動をとる。今は木の枝や昆虫の死骸を魔力で身（目）にまとつて、いかにも使い魔らしい風体だ。

この世界についてのおおよその知識は魔女のもとで学んでいた。僕のもといた世界の常識は全く通用しそうにないってことは理解している。まあ、そもそも前世の僕は享年十三歳であり、つまり前世においてでさえ僕の知識はその程度なのだ。ちょうどこの世界でも十三年生きただけれど、魔女の屋敷からほとんど出たことのない小僧の僕は、本から得られる程度の情報しか持っていない。世渡りの方はこれから身に着けなければならぬのだ。

僕の前を男女の二人組が通り過ぎた。

男のほうは体がパンパンにふくれた首のない風船族で、女のほうは背の高い、垂れ下がった犬耳の獣人族だ。身なりと態度から察するに、犬耳の女性は風船族の男の秘書らしきものなのだろう。

二人組は真正面だけを見据えて威風堂々歩いて行った。  
さて。

いつまでも街の人々ウオッチングをしているわけにもいかない。  
とりあえず、今日宿泊できる施設を見つけないければ。

僕はアルトを胸ポケットに突っ込み、さっきの二人組が向かった  
方向の逆のほうに足を向けた。

\*\*\*

宿屋自体はすぐに、しかもいくつも見つかったのだけれど、当然、  
ただで泊めてくれるような宿屋はあるはずもなく、僕はうなだれて  
ベンチに座り込んでいた。今いるの広場のような場所で、中央には  
大きな噴水がある。昼過ぎの今は子供を連れた母親方にぎわって  
いた。

「世界は違えど、ママさんの好きなことと言えば変わらず世間話な  
んだ……」

ひとりつぶやく。

ひとまず休憩をとることにして、僕の持ち物がすべて収納されて  
いるリュックの中身を点検してみた。替えの衣類と少しの薬草、  
…だけ。空腹も我慢できなくなってきて、いよいよ進退窮まった感  
があふれ出す。

と、底の方に光るものが。

若干テンションを上げつつ、しかし期待しすぎないようにそれを  
取り出す。

「……なんだこれ」

奇妙な形の石だった。いや、宝石かな。ところどころ泡立ったよ  
うな形。

アルトも胸ポケットから身を乗り出して興味深げにそれを見つめ  
ている。

うーん。僕はこんなものをリュックに入れた覚えはないし、とす

ると魔女のものなのだろうけど。

入れてくれたのだろうか、それとも偶然入り込んでいたのだろうか。

どちらにせよ、これは魔女の形見っぼいので、大事にとっておくことにした。

で。

結局これからどうしよう。

事態は何一つ好転していない。むしろ何もないとはいっきり確認した分、気分は落ち込んだ。

\*\*\*

ところで僕はアルトが抜けだして空洞になった左眼窩を前髪で隠している。しかも白髪で、オプションとして猫耳もついているのだ。猫耳、白髪という容姿はしかしこの世界ではさほど珍しいものではないようで、初めはおっかなびっくり周囲の眼を気にしながら行動していた僕も、しばらくしてから大丈夫そうだと悟ると、大手を振って気兼ねなく街を歩くようになっていた。

だから、公園のベンチに座り、自分より年下の子供たちが元気に遊んでいる姿を見るともなく見ていた僕がその悲鳴を聞いたとき、まさかそれが僕に対して放たれたものだなんて思いもしなかったのだ。

「いやああ！ 目玉が、目玉が浮いてるわああ！」

叫んだのは中年のおばさんで、おそらくは子供の保護者だった。その声に引き付けられるようにして広場中の視線が僕に集まる。

いや、正確には、僕の頭の上に浮いているアルトに、だ。

アルトは大きな葉っぱを翼代わりに用いて、空を飛ぶ練習をしているところだった。

僕はよくてもアルトはだめらしい。まあ、うすうす感じてはいたのだけだ。

アルトをよく見ようと好奇心をむき出しにして駆け寄ってくる子供たちと、それをやめさせようと金切声をあげている大人たち。あたりは騒然として、收拾がつかなくなっていた。僕が駆け出すと、アルトは素早くリュックの中にもぐりこんだ。そのまま騒ぎに乗じて、広場を抜け出した。

\*\*\*

十分距離が開いたところで足を緩め、一応後ろを確認してから、ゆっくりと歩き出す。

ああ、いまのでだいぶエネルギーを消費した。

腹から抗議の音が鳴っている。

逃げ込んだ通りは出店が多く、食欲を刺激するいい匂いに満ちていた。太陽は傾きかけていたけれど、どこの店も客の入りは上々のようで、道も混雑している。

と、

「うわっ」

突然目の前に人が現れ、よけきれなかった僕はその人とぶつかった。僕より一回り小さい少年のようなその人は、器用に体勢を立て直すそのまま走り去っていった。

……何か急ぎの用事があるのだろうか。何の目的もなく、というか生きる目的を探している僕にとってはどんな用でも行き先があるのはつらやましい。勝手にうらやまれても困るだろうけど、まあもう会うこともないだろうし。

がやがやとにぎにぎしい通りを、人の間を縫って移動する。それにしても、ついさっき通り過ぎた店の焼き鳥みたいな料理は尋常じゃないかぐわしさだった。いつか必ず食べに来よう。

ん、ああ、そうだ。目的がないといいつつ、今の僕の目的は宿探しだった。最悪でも夜までに雨風をしのげるポイントを見つけなければ。



よし。元気出してー。

「アルトも手伝ってよ」

と言ったところでアルトはリュックの中だと思いだし、そして、背中がいやに軽いことに気付いた。

「……………あれ？」

うそ、ない。リュックがない。ない！

え、なんで？ 落としたのか、どこで。いや、手提げならまだしもリュックを落とすなんて考えられないし……………、あつ。

あのぶつかったときか。

その場所からはすでに短くない距離を歩いて、離れてしまっている。しかもこの混み具合。

まずい。非常にまずい。

頼るものなどないこの世の中だ。

全財産と親友と親の形見を一気になくしてやっていけるほど、僕は強くない。

かくなるうえは、奥の手だ。

\*\*\*

僕とアルトのつながりは実に奇妙なものである。

もとは僕の左目だったアルトだが、今では自分の意思を持ち、自由に行動する。魔力を使い、周囲のものを利用して自身をカスタマイズすることもできる。ちなみに僕には魔力の魔の字もない。皆無である。生まれ変わったとはいっても、どうやら僕のスペックは前世と全く変わらないらしい。魔女の薬により体力は著しく向上しているが、魔法なんて使えるはずもないのだ。

魔法なんて使えないが、しかしそこは僕も魔女の弟子。長年の研究と自分自身を用いた人体実験により、一時的にアルトと感覚を共有できるようになったのだ。

つまり、僕はアルトが見ているものを見ることが出来る。  
さあ、いくぜ！

リンク開始。

視界いっぱい、少女の顔が飛び込んできた。

その名はニーナ（前書き）

物語よ動き出せ！

……よろしくお願いします。

## その名はニーナ

金目族の少女、ニーナは、リュックから飛び出した謎の目玉と格闘していた。

田舎者らしい、きよろきよろと視線をあっちこっちやっている白髪猫耳の少年を獲物に定めたまではよかった。まんまと荷物を掏ることに成功し、人目に付きにくい路地裏で戦利品がどれぐらい金になるか確認しようとしたのだが。

ニーナは体当たりしてきた目玉をかわし、横ざまに腕を振る。袖口から暗器の針が飛び、目玉を襲う。針は目玉の翼（ただの葉っぱに見える）を貫き穴を開けたが、そいつは意に介した風もなく、リュックに近づこうとするニーナをけん制してくる。

年齢<sup>よせい</sup>十三にして数多くの国と街を渡り歩いてきたニーナにとって、魔物に遭遇すること自体は珍しいことではない。対処するすべも心得ている。

しかしこの街に、治安のよいこの街に魔物が入り込んでいて、しかも盗んだリュックから飛び出したことに、ニーナは少なくとも動揺を覚えていた。

あんな小さな魔物が、この街の結界を破って侵入できるはずもない。とすると、あの田舎者が持ち込んだのだろうか。魔物の不法所持は重罪だ。しかも魔物所持の正当な権利を持ったものでさえ、この街への持ち込みは許されていないはず。

あの少年、純朴そうに見えて……。

いったん目玉との距離をとって、リュックの持ち主の目的と危険度について思考をめぐらしている隙に、目玉は細い小枝のような足をリュックにひっかけると、よろよろと路地の奥のほうに飛んで行った。

追うべきか、追わざるべきか。

夕暮れのまぶしい赤は、路地裏にまでは届かない。奥に行くにつれて闇の深くなるその道に、しかしニーナはほとんど迷わず、足を踏み入れたのであった。

\*\*\*

アルトは広場を目指していた。

元本体、現親友の少年と落ち合うためである。

少年が自分の視界とリンクしていることは感じられているのだが、土地勘のない自分たちでは街の細部を目にしたところで、はつきりとその場所がわかるはずもない。似たような構造が延々続く路地裏なんかにいるようではなおさら時間がかかるだろう。広場なら目印になる大きな噴水もあることだし、間違うこともない。

広場と言えば昼間、自分のためにちよつとした騒ぎが起きた。この街では自分のような魔物然とした物体は存在を許されていないらしい。騒がれると動きづらくなるし、なんだか悲しくなるので、アルトは目立たないよう心がけて移動した。暗い路地裏を、ときどき犬に吠えられながら進み、抜けてからは家屋の屋根に隠れながら進んだ。

方向感覚に優れたアルトはそうして進みながらも、一度も道を誤ることなく広場に到着することができた。

あの金目の少女も、隠れつつ進んだおかげでまけたのだろう、すでに姿は見えなかった。

少年が座っていたベンチの近くに茂みがあったので、そこに隠れることにする。もうすぐ少年が迎えに来るはずだ。

……あの少女のことは、少年に伝えなければ。自分がどれほど苦労したのか話して聞かせなくてはならない。まあ、少年は自分を通

して一部始終を見ていただろうし、自分には口がないからそもそも話すことはできないのだが。

ほっとしたのもつかの間、とうとつに、アルトの視界は闇に包まれた。

全身目玉のアルトにとってつまりそれは完璧に自由を奪われたことを意味している。

金目族の暗器使い、少女盗賊ニーナが、そこに立っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7023y/>

---

転生HD

2011年11月21日22時43分発行